

安東次男著作集 第二卷

安東次男著作集

安東次男著作集 第二卷

© 1976 Seidosha

昭和五十一年一月二十日印刷

昭和五十一年一月三十日 限定一〇〇〇部発行 0390—900016—3978

定価 四九〇〇円

著者 安東次男

発行者 清水康雄

校訂者 神崎 忠

題字 加藤楸邨

発行所 青土社 東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル (電)二九二―七〇七六

振替東京 192955

印刷所 大盛印刷

製本所 美成社

第二卷 目次

第一部

孤独について 9

魚目 25

孤独について(二) 41

京なつかしや 55

ほのかに白し 67

孤雁 87

浮身宿 113

よこたふ 133

半日の閑 157

くづれる 187

風狂 205

棄児秋風 237

残夢 251

京ちかき心 267

第二部

芭蕉と無常 297

「卯辰集」という撰集 317

悲しびそふる 341

ゆきてかへらぬ 351

春望 361

季語 367

秘すれば花 379

晩年の一句 389

すぎごころ 397

帰心 403

「源氏」と「猿蓑」 413

俳諧の色 421

枯野の夢 433

たたら雲 473

神祇釈教 493

同行 511

歌枕 521

真行草 547

恋の句 569

月と花 585

月もたのまじ 595

気比祭のこと 613

安東次男著作集
Ⅱ

口絵写真は著者。京都府下、八幡町橋本にて昭和四九年十二月撮影。提供・文芸春秋

第一部

孤独について

おもしろうてやがてかなしき鶺鴒舟哉

元禄元年（貞享五年）四月「笈の小文」の旅を終えた芭蕉は、しばらく京、湖南に滞在したあと、六月には岐阜を経て尾張に入ったが、そのときの吟である。「曠野」（元禄二年刊、荷兮撰）に「岐阜にて」「おもしろうさらしさばくる鶺鴒哉」（貞室）につづけて、「おなじ所にて」と前書してこの句形を出す。そのほか支考の「笈日記」に「鶺鴒舟も通り過る程に帰るとて」と、風国の「菊の香」に「此句晋子が所持の翁の自筆には面白うてやかてなかるゝ鶺鴒ふねかなと侍りぬよし晋子より申しぬ」と、それぞれ別の前書を付して伝える。「菊の香」の挙げるいま一つの句形については、「流るゝ」か「泣るゝ」か判然とせず、加えて芭蕉自身の句かどうかについても異論があ

るが、一応頼原退藏編「芭蕉俳句集」に従って芭蕉自身の句としておく。とすればこの句形は、あとで述べるごとくあるいは初案であろうか。「新編芭蕉一代集」に掲げる真蹟によれば、「ぎふの庄ながら川のうかひとて、よにことくしう云のゝしる。まことや其興人のかたり伝ふるにたがはず、浅智短才の筆にもことばにも尽べきにもあらず、心しれらん人に見せばやなど云て、やみぢにかへる、此身の名ごりをしさをいかにせむ」と詞書して「やがて悲しき」の句形で見える。

一句でまず問題となるのは、芭蕉自身が鶺鴒をしてたのしんだのか、それともどこかから見物していたのかという点であるが、これは前記「笈日記」の前書や「一代集」の詞書を、同じく「笈日記」に載せる「又やたぐひ長良の川の鮎なます（翁）」（「鶺鴒舟」の句の二句前にしるす。この句「又やたぐひ」の替りに「またたぐひ」の句形も他書には見える）の前書として、貞享五年夏日「名にしあへる鶺鴒といふものを見侍らむとて暮かけていざなひ申されしに人々稲葉山の木かげに席をまうけ盃をあげて」とあるのと照し合せて見れば、長良川の南にある稲葉山のふもとで、芭蕉たちは鶺鴒見の酒宴を張っていたことがわかる。同じく「笈日記」には、そのあと「み

のゝ国ながら川に望て水楼あり、あるじを賀嶋氏といふ。いなば山後にたかく乱山両に重りて、ちかゝらず遠からず、たなかの寺は杉の一村にかくれ、きしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。さらし布所／＼に引はへて、右にわたし舟うかぶ、里人の行かひしげく、漁村軒をならべて網をひき釣をたるゝ、をのがさま／＼もたゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ斗入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかぐり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見もの也けらし。かの瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。若此楼に名をいはむとならば、十八楼ともいはまほしや」(十八楼ノ記)としるし、つづいて「此あたり目に見ゆるものは皆涼し」の一句を載せている。賀嶋氏は賀嶋鷗歩、土地の富裕な俳人でもあった。「おもしろうて」の句が、鷗歩の水楼での招宴の席で作られたものか否かは、知るよしもないが、ほぼ同様眺望の下での句であったことはまちがいない。「稲葉山の木かげに席をまうけ」とあるから、あるいは野天での句筵でもあったろうか。この句の闇の深さを味うには、そう見る方がむしろ好ましいようである。

ところでこの句は、謡曲「鵜飼」を踏えて作られたとするのが通説であって、その一つはもちろん、有名な「鵜の段」の地謡「面白の有様や、面白の有様や、底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひ廻し、かづき上げすくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後の世も忘れはてゝ面白や、漲る水の淀ならば生簀の鯉や上らん、玉島川にあらねども小鮎さばしるせゝらぎに、かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ、鵜舟の篝火消えて、闇路に帰るこの身の、名残惜しさを、如何にせん名残惜しさを如何にせん」である。いま一つは、「鵜使ふことの面白さに、殺生をするはかなさよ……鵜舟にともす篝火の消えて闇こそ悲しけれ」というそれとは別の節であるが、「句選年考」もこの「二所の詞をとり一句を仕立てたる、面白うてやがて悲しきの句のつり合ひなり」としてゐる。以後、諸家何れかに重点を置いて援用するのがこの句の解釈であるが、たしかに「二代集」の詞書、あるいは、「十八楼ノ記」の「入日の影も月にかはりて」云々を読めば、芭蕉の胸中に「鵜飼」の一節があったことは疑うべくもない。そこからたとえば当代の卓れた芭蕉鑑賞家である山本健吉氏のごときは、「芭蕉は稲葉山の麓で、鵜

飼が終つて舟が通り過ぎるのを見送りながら、一瞬闇路へ帰る鵜使の老翁のイメージを思い浮かべ、深い哀愁を覚えた。それは、酒宴も果て、篝火も消えて一夜の興を尽した後の、深い気疲れにうち重なつた。一刻前の〈面白の有様〉とは、あまりに対照的な感情である。殺生のあさましさを悲しさと感じたなぞと、穿鑿する必要はない。だが現実の矚目に、謡曲の情趣が二重映しになつて、〈面白うてやがて悲しき〉の詠歎となつたことは、否定できない。一夜の時間的推移のなかに、無常迅速の情緒を濃くただよわせているのが、〈鵜の段〉の一節である。芭蕉はその情緒をそのまま取つて己れの感情とする」と評される。全く同感というほかない、いたれりつくせりの解釈である。しかしそれにつづけて氏が「はつきり言えば、この句は失敗作である。謡曲の詞章に結合することによつて、現実の感情がより高い詩的表現に達しようとして、達しそこなつた作品である。それは一つの詩的情緒として、あまりにも『鵜飼』が完璧なものであつたために、全般的にそれにもたれかかることによつて、その情緒を概念的に翻訳するに止まつたからだ。その結果、表現されたものは、かえつて芭蕉のあまりにもなまの現実感情に逆転してしまつた」(芭蕉)とされるのを読むと、私な